

今、マレーシアでは……

小林 美実

マレーシアの最北西の州ベルリスは、この国で最も小さい州である。人口わずか数万の州都カンガールは、どこにメインストリートがあるのかわからないぐらいの、田園風景のところどころに小さいビルや商店や住宅が点在しているといった静かな町である。

昨年八月十六日、十七日の二日間、この小さな

町でマレーシアの Community Development Division ministry of Rural Development (農村部の生活向上のための開発局。通称 KEMAS) 主催のワークショップが行われ、全国十四州から一〇〇人余の保育現場や養成所(職業訓練所)の教員をしている女性たちが集まった。内容は幼児のための人形劇で、私も所属している保育者集団による劇団

「ザ・ほっぴい」が指導の依頼を受けた。このワークショップの後、最近ペナンに次ぐ観光地として人気のでているランカウイ島で、KEMAS傘下の保育施設の子どもたち対象の公演、更にペナン近くの保育者養成施設（訓練校）でも、簡単なワークショップと公演を行った。

今、マレーシアは、首都クアラルンプールの東洋一の高層ビルや、南のシンガポールから北のタイのバンコクまでマレーシア半島を縦断するハイウェイ、各地の大工業団地の建設等でめざましい発展を遂げつつある国である。この国には二十二年前（一九七六年）から公演やワークショップで計七回訪れているが、初めの頃は、山羊やあひるがうろうろする狭い道路を馬力の無いバスに長時間ゆられて、それでもすばらしい南国の風景をゆったりした気分で見たり、時々バスを止めては路上の粗末な店で、豊富な珍しい果物を沢山買い込んで旅を続けたもの

だった。同行する現地の役人や教員も実にのんびりしていた。いつ目的地に到着するのか一向に無頓着。夕方到着すると思っていたのが、途中でエンジンがトラブルをおこしたりして、着いたのは午前三時。それでも宿舎の訓練校では、校長先生をはじめ、先生、学生、職員みんなが寝ずに待っていてにぎやかに出迎えてくれた。今もまだ日本からみれば自然や人々の素朴さは残っているが、変化は激しい。はじめの頃この国にくと、必ず聞いたことばに、「Look East」があった。日本のような繁栄、発展をめざせ、ということ。私たちにワークショップの依頼があったのも、その政策の一環だったと思う。

この国の問題の一つに、経済を握っている少数の中国系の人々に対して、大多数のマレー系の人々の貧しさがある。はじめてこの国で幼児や低学年児童対象の公演をした時、私たちはそのことに全く気付

かなかった。クアラルンプール市内の立派な施設の幼稚園や小学校を訪れ、一応の設備や子どもたちの礼儀良さに感心したものだ。そしてこれがこの国では普通のことのように案内された。

私たちがこの難しい問題をはっきり知ったのは、マレー系の青年たちの教育に携わっていた日本の青年海外協力隊員の青年に出会ったからである。当時、私たちは、夜間日本語学校に通う、車を持ち比較的裕福な、しかし大変熱心で努力家ぞろいの、主に中国系の勤労青年たちとも交流していた。この青年たちもマレーシアの次代を担う人々。しかしこの国には、もっと貧しく恵まれない人々がいることを知り、まずマレー系小学校の公演を受けることにした。はじめて訪れた農村の小学校のことは今でもはつきり覚えていて。その木造の粗末な平屋の校舎はゴム園のとなりであり、ゴムの木から採取したばかりの液を煮る異様な吐き気をもよおす臭いでいっ

ぱいだった。この臭いも、やがて狭い教室いっぱいに集まった子どもたちの熱気で忘れてしまった。とにかくすばらしい子どもたちだった。好奇心と嬉しさで輝く目、歓声をあげたり笑ったりするたびに光るまっ白な歯が印象的だった。こうした子どもらしい楽しみも少なく、半日の学校が唯一、外の世界と出会うチャンスなのだろう。演じられる人形劇（ことばのいらぬいショーや簡単な無言で演じられるドラマなど）の人形の動きや表情や音楽に全身で反応するその豊かな感性に感動した。制服の白いシャツや半ズボン、スカートはおそろいだが、汚れていて本当に粗末だった。しかしそんなことは全く気にならなかった。最後に子どもたちと手を取り合い、一緒にマレー語の歌を歌いあったのだった。当時公演した多くのマレー系小学校や幼稚園では、都市部の幼稚園のお行儀良さはなかったが、感情表現豊かな子どもたちであふれていた。



▲人形の頭づくりをするマレーシアの先生たち（受講生）

一九八一年の四回目の公演から、KEMASの正式な要請で研修を引き受けることになった。クアラルンプール、クアラトレンガヌ、ケバラバタス、マラッカ四箇所の訓練校では、全国の農村地帯から選ばれた若い女性たちが半年間ここで保育について学んでいた。例えばその間、外出は許されない。生活習慣、特に衛生面で良い習慣が身に付くまでは、故郷の生活に戻せない、ということだった。どの訓練所にも、食事の前の手洗い、排泄は便所で、病気の時は医者へ、など、私たちにとってしごくあたりまえのことが絵で説明されていた。太陽が照れば、庭で食器を並べ、日光消毒をする。保育の勉強といっても、このような日常生活を向上させることから始めるのである。学生たちの宗教は全員イスラムである。肌を露出することはタブー。だから熱帯の暑さの中、常に長袖、ロングスカート、頭から深めにスカーフをかぶっている。何とも非活動的なス

マイル。当時は研修中は訓練校で学生たちと一緒にくらしした。だから時間はいっぱいあるのだが、いつも優先するのは、一日五回の礼拝と、午前午後の「Tea Time」。あと一針で人形が完成するというのに、時間になればボイと仕事をやめてしまう。その度、私たちはイライラした。しかしそのうち私たちもこのペースに慣れ、どうせ帰国すれば経済成長の社会で追いたてられる生活が待っているのだから、すこしのんびりしよう、という気分になった。

一九九一年までに計四回のワークショップを行った。たった十年の間に、訓練校の教員、各地の先生の指導の担当者のレベルは確実に上がった。動作も機敏になった。「Tea Time」といってもなかなか作業をやめない。夜中まで自習している。礼拝の時間だけは必ず守っているが。

今年のワークショップは初日に大きい公演をしたので、たった一日半の上、障害児を含む子どもたち



▲マレーシアの幼稚園。おやつの時間

への小さい公演が急にはいり、受講者たちのグループ別の発表が夜九時開始の真夜中にやっと終了という事になってしまった。人形劇の研修という事、日本でも人形を作ることが主になりがち。人形ができること、それでもうすべてできたような錯覚をしがちな。円形や楕円形の発泡スチロールをそのまま頭にした簡単な人形だが、幼い子どもたちのために短いドラマをつくり、動きを工夫し、ことばや音や音楽を選び付けることまで一応できたのも、今までの研修の積み重ねの結果と思う。毎回この研修に参加している者の多いグループは、さすがであった。私たちもその成果を喜びあった。

さて、この国でも新しい問題が起きている。環境破壊である。子どもが心身ともに健康に育つためには、ただ保育の現場や生活のレベルが上がれば良いのではないことを、私たちは日本の社会の現状で知っている。今回最もショックを受けたのは、今新

しいリゾート地になりつつあるランカウイ島でのこと。港、空港、ホテル、免税店、ヨットハーバーその他の建設がどんどんすすんでいる。地元の子どもたちにはほとんど無縁と思われるさまざまな種類のプールを中心とした巨大な遊園地も海岸に既に完成している。あちらこちらに、東南アジア特有の赤土が剥き出しになっている。これらが雨の度に海に流れ出し珊瑚礁や砂浜やマングローブの海岸が消えていくのだ。海岸の砂浜の一部では、美しく見える砂の下にヘドロがたまっていて、それに足をとられた者もいた。残念なことには、このような状態がこの国をはじめ、アジアのあちらこちらにみられる。

Look Eastで日本に学んで欲しかったものは何だったのか。

(宝仙学園短期大学)